

日本語初級・中級教材における推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」について

—台湾人日本語学習者のための提言—

黄 鈺涵

キーワード

教材分析・推量表現・発話意図・使用場面・待遇レベル

1. はじめに

海外の日本語教育現場では、ネイティブ・スピーカーと接触できるような日本語の環境という要素が欠けているため、学習者が学習の手掛かりを探す時に、教科書に求めることが多い。このような状況において、教科書が学習者の学習手段として果たしている役割は大きいと言える。特に、文法・文型を中心とした最初の段階では、学習者は教科書から受けたインプットが一番大きいので、会話や作文などの言語使用は、教科書に強く影響されると思われる。しかし、従来の日本語教科書は、ある学習項目を指導しようとする際に、文法的性格だけを理解させる段階にとどまり、それを実際にどのような場面で、どのように用いるかについては言及していない。従って、学習者が様々な会話場面で適切な表現を使いこなすことができないという問題点がある。

台湾の日本語学習者にとって、日本語の類似表現の意味や用法を正確に習得することは困難である。それにもかかわらず、現状として日本語教科書では類似表現に関わる文法項目があまり整理されていないため、台湾の学習者にとって、類似表現を間違える一つの原因となっている。その中で、台湾の学習者にとって習得が困難な項目の一つに、「ようだ・らしい・みたいだ」がある。これらは、極めて類似の意味を表し、共通する用法も多いという点で、定着しにくい文法項目である。特に、台湾の日本語学習者にとっては、日本語ではこれら三つの文法項目は、類義語として使い分けがされているが、中国語訳では「好像」のみなので、訳語からの誤用が多いという問題点がある。

本稿では、推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」が様々な場面で、どのような発話意図で発せられるのか、どのような機能を果たすのかという観点から、三形式の基本的な性質を明らかにし、現在台湾で使われている日本語初級・中級教科書を分析し、その中における推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」に関する内容を考察する。また、アンケート

調査を通して、台湾の学習者の「ようだ・らしい・みたいだ」に対する使用状況を分析し、日本人にも同じ調査を行い、現在日本における使用意識を調べ参考にする。最後に、日本語教科書における問題点に対して、教科書のあるべき姿を提案する。

2. 先行研究

推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の三形式のうち、一番多く論じられているのは「ようだ」と「らしい」である。先行文献としては、森田（1980）、柏岡（1980）、柴田（1982）、寺村（1984）、早津（1988）、中畠（1990）、三宅（1995）、野林（1999）、菊地（2000）などがある。その中で、「ようだ」と「らしい」の違いに関する論説は、概して四種類にまとめることができる。^{注1}

① <直接情報と間接情報>

「ようだ」と「らしい」はいずれもある根拠に基づいた推量を表すものであるが、「ようだ」は話者自らの感覚や経験など直接的な情報による推量判断であり、「らしい」は他から得た間接的な情報による推量判断である。例えば（1）では、話し手が実際に経験している事態に対して、直接的情報に基づいて判断する場合は「ようだ」を用い、（2）では、話し手が伝聞など何らかの間接的情報に基づいて判断する場合は「らしい」を用いる。

（1）店内をひととおり見てきたが、この店の品物はどれも近くの店より一割ぐらい安いようだ。（早津（1988）より）

（2）甲子園での巨人戦を取材してきた同僚の話では、阪神ファンの熱狂ぶりはききしに勝るものであるらしい。（早津（1988）より）

「直接」と「間接」という判断の根拠の質の違いによって、両形式の使い分けを説明しようとする研究は、柏岡（1980）、森田（1980）、寺村（1984）、早津（1988）などがある。

② <話者の内面意識>

話者の持つ意識の違いによって、両形式のニュアンス差を説明しようとする研究は、以下の二つの観点から分析できる。

1) <心理的距離>

事態と話者との心理的距離が近い場合は「ようだ」を用い、事態と話者との心理的距離が遠い場合は「らしい」を用いる。例えば、同じ判断の対象となる事態に対して、（3）では、話し手が判断の対象となる事態を自分に身近なもの、すなわち自分に近い立場のものとして捉えているが、（4）では、話し手が判断の対象となる事態を自分に離れているもの、すなわち自分に遠い立場のものとして捉えている。

（3）新聞で見ましたが、この間の地震によるメキシコの被害はたいへんなもののようですね。（早津（1988）より）

（4）新聞で見ましたが、この間の地震によるメキシコの被害はたいへんなものらしいですね。（早津（1988）より）

述べられる事態と話者との心理的距離の遠近によって、両形式にニュアンス差があると論じている研究は、柴田（1982）、早津（1988）などがある。

2) <責任意識>

「ようだ」は叙述内容に対する責任意識を持っているというニュアンスがあるが、「らしい」は責任回避のニュアンスがある。例えば、(5)では、話し手が申し訳ない気持ちをこめて発話する場合は「ようだ」を用いたが、(6)では、話し手が責任回避のため、操作を間違えた者がまるで自分以外の他人であることを意図的に表す場合は「らしい」を用いている。

(5) 操作を間違って機械が壊れてしまったようです。(金(1992)より)

(6) 操作を間違って機械が壊れてしまったらしいです。(金(1992)より)

話者が自ら下した判断に対する責任意識の有無によって、両形式にニュアンス差があると論じている研究は、柏岡(1980)、金(1992)などがある。

③ <様態と推量>

「ようだ」は話者が自身の感覚として観察対象の外見・様子を述べる表現であり、「らしい」は外部に何か判断の根拠となる事柄があって、それに基づいて下す推量表現である。例えば、(7)では、話し手が視覚などを通して得られた外見・印象を表現する場合は「ようだ」を用い、(8)では、話し手がある根拠に基づいて推定を表す場合は「らしい」を用いる。

(7) 洞窟の奥をすかしてみると、ずっと急斜面が続いているようだ。とても行けそうにない。(田野村(1991)より)

(8) やおら男たちが数種類の太鼓を持って現れる。動物の角でできた笛がブオーとほら貝のような音をあげた。いよいよ祭りが始まりらしい。

(田野村(1991)より)

「様態」と「推量」という両形式の本質的・基本的性格の違いを論じている研究は、中畠(1990)、田野村(1991)などがある。

④ <観察対象と判断内容の距離>

「ようだ」は、対象を直接観察し、観察に密着した一体のものとして様子を述べる場合に使い、「らしい」は、観察に推論を加えて、または伝聞に基づいて、判断内容を述べる場合に使う。すなわち、観察対象と判断内容の距離が近いと捉えれば「ようだ」、遠いと捉えれば「らしい」を用いる。例えば、(9)では、話し手自身が視覚などの感覚によって直接観察し、推論を加える余地がない、観察対象の様子を述べる場合は「ようだ」を用い、(10)では、話し手が直接の観察に密着して対象の様子を述べるわけではなく、推論を伴ったりして判断内容を述べる場合は「らしい」を用いている。

(9) (店頭でコートを見て) このコートは僕には少し小さいようだ。

(菊地(2000)より)

(10) あの秘書は愚鈍なように見えるが、あのやり手の社長が手放さないので、あれでなかなか有能らしい。

(菊地(2000)より)

観察対象と判断内容の距離によって、両形式の使い分けを説明しようとする研究は、菊地(2000)などがある。

3. 本稿の立場

3.1 各論説における問題点

①の研究では、「ようだ」は「直接的情報」による推量判断であり、「らしい」は「間接的情報」による推量判断であると説明しているが、「直接的情報」と「間接的情報」という基準を用いた説明では議論が不十分であり、また、主要な要因ではない「判断根拠の違い」という観点から、「ようだ」と「らしい」の差異を使い分けることは不適切である。これに関しては、野林（1999）は以下のように述べている。「直接情報と間接情報がそれぞれ判断の根拠であるにもかかわらず、いずれの場合も「ようだ」「らしい」両形式が共に使用可能であることから分かるように、判断の根拠の質の違いは（直接情報か間接情報か）、両形式の使い分けの要因として必ずしも機能しない。」主観と客観という分け方は、判断の根拠の違い以外に、話者の心理面の要素も関連していると思われる。また、「ようだ」と「らしい」両者とも推量表現として扱い、「伝聞」用法や「婉曲」用法に触れていないという問題点がある。

②の研究では、「話者の心理的態度・意識」の違いに注目し、柴田（1982）、早津（1988）の論点では、「ようだ」は述べられた事態と話者との心理的距離が近い、「らしい」は述べられた事態と話者との心理的距離が遠いと説明している。一方、柏岡（1980）によると、「ようだ」と「らしい」の違いは、「ようだ」は話者が自分の下した判断に対して、責任意識を持っているが、「らしい」は責任意識がないということである。「心理的距離」と「責任意識」という二つの概念は、確かに「ようだ」と「らしい」の違いと関連していると感じているが、「ようだ」と「らしい」の使い分けには、判断の根拠など他の要素も絡んでくるので、心理的な要素だけが両形式の根本的な違いとは言えない。

③の研究では、「ようだ」は外見・様子・印象・現実界などを表す形式であり、「らしい」は根拠に基づく事態の推定を表す形式であると説明し、「ようだ」と「らしい」両形式それぞれ固有に備わっている意味の違い（「様態」と「推量」）を指摘している。しかし、「ようだ」は「様態」であり、「らしい」は「推量」であるというように分類すれば、両形式の類似・共有する用法、例えば「ようだ」と「らしい」の「推量」用法や「婉曲」用法に触れていないという問題点がある。

④の研究では、「観察対象と判断内容の距離」、「事態と話者との心理的距離」といった概念はあくまでも抽象的であり、何を基準として距離の遠近を判定するのかは不明である。

以上の四つの論説では、「ようだ」と「らしい」の違いをそれぞれの基準で使い分けているが、両者の差異には様々な要素が関係しているので、決して一つの論説だけに当てはめることができないと思われる。

3.2 本稿の捉え方

以上の先行文献をふまえて、本稿では、「ようだ・らしい・みたいだ」の機能に重点を置いて、従来の論説で取り扱っていない「発話意図」と「使用場面」の観点から、三者の異同を分析する。

3.2.1 発話意図の視点から

従来言われる「ようだ・らしい・みたいだ」の「推量表現」は、発話意図の観点から分析すれば、概して「伝聞」、「推量」、「婉曲」という三つの用法に分類することができる。

【表1】推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の異同

用法	らしい	ようだ	みたいだ
伝聞	他者から聞いて得た情報を根拠として推定を下す場合に用いる。 話者自身のものではない、他話者自身の事態認識が提示されている。例1		
推量	(1) 事実だと断定することができないが、何らかの根拠（間接的情報）に基づいて推定を下す場合に用いる。 根拠の持つ客観性に依存する傾向が強い（客観的）。例3		
	話者自身の事態認識が提示されている。例2	話者自身の事態認識が提示されている。例2	話者自身の事態認識が提示されている。例2
	(2) 話し手自身の直接経験や感覚に依存した事柄（直接的情報）を根拠として、推定を表す場合に用いる。 ・話者が「ひきはなし」の態度をとっている。例5		
	話し手自身の主体的な立場に立った判断を表す（主観的）。例4	話し手自身の主体的な立場に立った判断を表す（主観的）。例4	話し手自身の主体的な立場に立った判断を表す（主観的）。例4
婉曲	事実に近い事柄（様態）を述べようとするが、断定を避け相手に対して控えめに表現する場合に用いる。 ・話者自身が下した判断に対する責任意識がない。例7		
	話者が「ひきよせ」の態度をとっている。例6	話者が「ひきよせ」の態度をとっている。例6	話者が「ひきよせ」の態度をとっている。例6
	相手や第三者の心情や立場に配慮し、断定を避けるために用いられる表現。例9、例10	相手や第三者の心情や立場に配慮し、断定を避けるために用いられる表現。例9	相手や第三者の心情や立場に配慮し、断定を避けるために用いられる表現。例9

① 伝聞用法

他者から聞いて得た情報を根拠として推定を下す場合に用いる。「らしい」を使う場合は、話者が他から得た情報をそのまま第三者に伝え、自身の判断を表さない、つまり、他者の事態認識を提示している。一方、「ようだ」と「みたいだ」を使う場合は、話者が他から得た情報を自分の中で処理したあと、第三者に伝えるので、話者自身の事態認識を提示している。

例1：（テレビで天気予報を見て、その後、天気予報を見てない友人に）

「明日、雪が降るらしいですよ。（天気予報でそう言っていました。）」

⇒他者の事態認識

例2：（テレビで天気予報を見て、その後、天気予報を見てない友人に）

「明日、雪が降るよう（みたい）ですよ。」

⇒話者自身の事態認識

② 推量用法

(1) 事実だと断定することができないが、何らかの根拠（間接的情報）に基づいて推定

を下す場合に用いる。「らしい」を使う場合は、話者が「客観的」な立場に立って、ある根拠に依存し、推量判断を下す傾向が強い。一方、「ようだ」と「みたいだ」を使う場合は、話者が「主観的」な立場に立って、ある情報から自身の推量判断を表す傾向が強い。

例3：「何か事故があったらしいですね。電車がだいぶ遅れています。」

⇒客観的な推量判断

例4：「何か事故があったよう（みたい）ですね。電車がだいぶ遅れています。」

⇒主観的な推量判断

(2) 話し手自身の直接経験や感覚に依存した事柄（直接的情報）を根拠として、推定を表す場合に用いる。「らしい」を使う場合は、話者が「ひきはなし」の態度を持って、自分の五感による情報を一つの根拠として認め、その根拠に基づいて推量判断を下す。一方、「ようだ」と「みたいだ」を使う場合は、話者が「ひきよせ」の態度を持って、自分の五感による情報から自らの推量判断を表す。

例5：「寮にいないところを見ると、彼はもう国へ帰ったらしいですね。」

⇒ひきはなしの態度

例6：「寮にいないところを見ると、彼はもう国へ帰ったよう（みたい）ですね。」

⇒ひきよせの態度

③ 婉曲用法

事実に近い事柄（様態）を述べようとするが、相手の立場への配慮、発言の責任を負いたくない気持ち、相手の示す話題に関わりたくない気持ちなどから、断定を避け相手に対して控えめに表現する場合に用いる。「らしい」「ようだ」「みたいだ」は、三者とも断定を回避する言い方であるが、話者の心理的な態度がそれぞれ異なる。「らしい」を使う場合は、話者が自分の下した判断に対して責任を持ちたくないで、事実に近い事柄を知りながら、意識的に伝聞の表現を用いて話をすることによって、その責任を他人に託す。一方、「ようだ」と「みたいだ」を使う場合は、話者が自分の下した判断に責任を持つ意識があるが、相手や第三者の立場を配慮し、断言を避けるために、婉曲的な表現方法を用いる。ただし、相手の意向や感情などに関わる内容を表す際に、「ようだ」は用いられても、「みたいだ」を用いることはできない。

例7：「林君はもう帰ってしまったんですか。」

（帰ったことを知っていながら）「ええ、帰ったらしいですね。」

⇒責任意識がない

例8：「林君はもう帰ってしまったんですか。」

（帰ったことを知っている）「ええ、もう帰ったよう（みたい）ですね。」

⇒責任意識がある

例9：A：「雨が降ってきましたね。」

B：「ええ、そのよう（そうみたい）ですね。」

⇒婉曲用法

例10：「分からないようでしたら、遠慮なく聞いてください。」（×みたいだ）

⇒婉曲用法

3.2.2 使用場面の視点から

推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の使用は、以上の話者内部の「発話意図」以外に、外部の「使用場面」という要素も強く働いていると思われる。本稿では、使用場面の観点から、三者の文体や待遇表現との関連性を分析していく。

(1) 文体との関わり

話し言葉では、「ようだ」「らしい」「みたいだ」三者ともよく使われているが、それぞれの機能は、使用場面によって異なる。対話の場合は、「らしい」は「伝聞」の用法として使われることが多く、「ようだ」と「みたいだ」は「推量」と「婉曲」の用法として使われることが多い。「推量」と「婉曲」の用法では、「ようだ」も「みたいだ」も意味的な差異がない。ただし、「みたいだ」は「ようだ」のくだけた表現であり、会話ではよく使われている口語的用法であるので、正式な文章ではあまり使われていない。また、独り言の場合は、「推量」を表す時に、自分に対して丁寧な言い方をする必要がないので、「みたいだ」を使うことが一番多いと思われる。

書き言葉では、「ようだ」と「らしい」両者とも使われるが、単に伝聞を表す場合は、「らしい」を使うことが多い。しかし、学術的な文章や記事などの正式な文章では、著者の責任意識と関わりがあるので、一般的に「ようだ」は「らしい」（伝聞っぽい感じ）よりよく使われている。

(2) 待遇レベルとの関わり

今までの「ようだ・らしい・みたいだ」に関する論説は、文体との関わりをある程度で言及しているが、実際の使用場面における待遇表現との関係については触れていない。本稿では、待遇表現の観点から、推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の使い方を考察する。

私たちは、日常人と話す時、自分の話を受け手、場所、雰囲気や意図などによって、言葉を使い分けている。話し手の待遇レベル（人間関係や場面など）に対する認識によって、同じ内容でもいろいろな言い表し方で伝えられるのである。『敬語表現』では、待遇表現について、以下のように定義づけている。「『待遇表現』とは、ある『表現意図』を持った表現主体が、「自分」「相手」「話題の人物」相互の「人間関係」や、「場」の状況を認識し、表現形態（音声表現形態あるいは文字表現形態）を考慮した上で、その「表現意図」を叶えるために、適切な題材・内容を選択し、適切な言材を用いることによって文話（談話あるいは文章）を構成し、媒材化する、といった一連の表現行為である。」

また、「人間関係」や「場」という待遇レベルの概念については、以下のように説明している。

1. 「表現主体」は、「自分」と「相手」との相対的な「人間関係」について、社会的・文化的な「立場・役割」の持つ意味を考慮しつつ、「相手」を上下の軸に位置づけて認識する。^{注2} その位置づけを $A+2$ から $A-2$ までの五段階⁺で表すことにする。
2. 「表現主体」は、「自分」と「相手」との「人間関係」を考慮して、「話題の人物」の

位置づけを決める。「話題の人物」も＜W $\boxed{+2}$ から W $\boxed{-2}$ までの五段階＞で位置づける。

3. 「表現主体」は、表現する「場」を、「改まり」「くだけ」という基準によって位置づけ認識する。その位置づけも＜B $\boxed{+2}$ から B $\boxed{-2}$ までの五段階＞で表すことにする。

推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の使用は、このような待遇レベルとは大きく関わっている。つまり、「人間関係」や「場面」の違いによって、その使い分けが違ってくる。本稿では、「人間関係」や「場」に対する位置づけの認識の差を、 $\boxed{-}$ $\boxed{0}$ $\boxed{+}$ という三つのレベルに大きく分け、それぞれの使用状況を具体化する。

「ようだ」と「みたいだ」の「推量」と「婉曲」の用法は、「丁寧さ」の観点から、以下のような使用状況が考えられる。

◎ 一番ふさわしい

○ ふさわしい

△ やや不適切

ようだ みたいだ

A $\boxed{+}$	◎	△	・相手レベル $\boxed{+}$ の場合は、「ようだ」が使われやすい。
A $\boxed{0}$	○	○	・相手レベル $\boxed{0}$ の場合は、両者とも使える。
A $\boxed{-}$	△	◎	・相手レベル $\boxed{-}$ の場合は、「みたいだ」が使われやすい。
B $\boxed{+}$	◎	△	・場レベル $\boxed{+}$ の場合は、「ようだ」が使われやすい。
B $\boxed{0}$	○	○	・場レベル $\boxed{0}$ の場合は、両者とも使える。
B $\boxed{-}$	△	◎	・場レベル $\boxed{-}$ の場合は、「みたいだ」が使われやすい。
W $\boxed{+}$	◎	△	・話題の人物レベル $\boxed{+}$ の場合は、「ようだ」が使われやすい。
W $\boxed{0}$	○	○	・話題の人物 $\boxed{0}$ の場合は、両者とも使える。
W $\boxed{-}$	△	◎	・話題の人物レベル $\boxed{-}$ の場合は、「みたいだ」が使われやすい。

「ようだ」は「みたいだ」より丁寧さが高いため、基本的には、相手レベルや場レベルが高い場合は、「ようだ」の使用が多く見られ、相手レベルや場レベルが低い場合は、「みたいだ」の使用が多く見られる。ただし、相手（A）、場面（B）、話題の人物（W）といった三つの要素が同時に現れる時に、相手レベルと場レベルが、話題の人物レベルより先に機能する。また、相手レベルと場レベルが異なる場合は、レベルの高いほうが先に機能する。これに関しては、以下のような例を挙げることができる。

例1) 夕方、親しい友達（A $\boxed{-}$ ）と一緒に先生（W $\boxed{+}$ ）の研究室に行ったが、研究室の鍵がかかっていることを気付いて、友達に「先生、もう帰ったみたいよ。」と言うのがこの場面が一番適切である。もちろん、「先生はもうお帰りになったようですよ。」と言うのも正しいが、この場合は相手レベルの要素が話題の人物より強い、すなわち相手レベルが先に機能するので、相手レベル $\boxed{-}$ の親しい友達に対して、「ようだ」という丁寧な言い方をする必要がないと考えられる。

例2) 飲み会の場所の入り口（B $\boxed{-}$ ）で、先生（A $\boxed{+}$ ）とゼミの人たちと待ち合わせをする。先生に「もう全員来ましたか。」と聞かれて、同級生の木村さんだけがまだ来っていないのに気が付いて、先生に「木村さんはまだ来ていないようです。」と言うのが一番ふさわしい。もちろん、「木村さんはまだ来ていないみたいです。」と言うのも大丈夫だが、

この場合は相手レベルが場レベルより高い、すなわち相手レベルが先に機能するので、相手レベル $\boxed{+}$ の先生に対して、「ようだ」という丁寧な言い方をする必要があると考えられる。

以上は、待遇レベルの観点から試みた「ようだ」と「みたいだ」の分類であるが、もちろん、実際の会話場面では、話し手の認識によって、使用状況が多少違うことがある。日本語教育の現場において、推量表現を教える最初の段階では、このような待遇表現を加えた説明や練習が、一つの有効な提示方法だと思われる。

3.2.3 日本語教育の立場から

以上は、「ようだ・らしい・みたいだ」のあらゆる用法を分析した体系的記述であるが、日本語教育の立場としては、これらの用法をいかに指導すれば、学習者が正確に習得し適切な表現を身につけることができるのかという方向に向かわなければならない。

もちろん、初・中級の導入としては、以上のような複雑な分類全体を提示するわけにはいかない。実際の使用場面で、一番多く使われている典型的な用法や基本的な概念を学習者に認識させることが大事である。その指導上のポイントとしては、以下のようなものが考えられる。

【表2】推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の指導ポイント

用法	らしい	ようだ	みたいだ	機能上の違い
伝聞	✓			「ようだ」と「みたいだ」の「待遇表現」上の違い(丁寧さ) 「らしい」と「ようだ・みたいだ」の「責任意識」の差異
推量		✓	✓	
婉曲	✓	✓	✓	

つまり、3.2.1の【表1】の分類図における全ての用法を提示するわけではなく、最初の段階では、「らしい」を「伝聞」の用法として、「ようだ」と「みたいだ」を「推量」の用法として提示する。「ようだ」と「みたいだ」を指導する時に、両者の待遇レベルの違い(丁寧さの違い)を学習者に意識させる必要がある。その次の段階では、「婉曲」の用法における「ようだ・らしい・みたいだ」の責任意識の差異を認識させることが効果的だと思われる。

4. 各文法項目の日本語教科書における扱い

4.1 各教科書における提出位置の一覧

現在、台湾で使われている日本語教科書と、市販されている日本語教科書を調査対象として取り上げる。その中で、「ようだ・らしい・みたいだ」の文型がのっている日本語初級・中級教科書とその提出位置については、以下のように整理した。^{注3}

【表3】によると、今回調査した教科書では、「ようだ」と「らしい」の表現は、ほとんど初級の後半から現れ始め、「みたいだ」は、初級でも中級でも提示されていない教科書が多いということが分かった。また、「ようだ」「らしい」「みたいだ」の表現に関しては、両者か三者を同じ課で一遍に提出し、その違いを明確にしようと意図する教科書は7

【表3】各教科書における提出位置の一覧

	教科書	全課数	提出位置			教師用	学習者用
			「ようだ」	「らしい」	「みたいだ」	指導書	文法書
1	みんなの日本語Ⅰ	25				○	○
	みんなの日本語Ⅱ	25	(Ⅱ) L. 47			○	○
2	新日本語の基礎Ⅰ	25				○	○
	新日本語の基礎Ⅱ	25	(Ⅱ) L. 47			○	○
3	日本語Ⅰ	32	(Ⅰ) L. 16	(Ⅰ) L. 16			
	日本語Ⅱ	22					
4	初級日本語	28	(Ⅰ) L. 25	(Ⅰ) L. 28			
5	文化初級日本語ⅠⅡ	37	(Ⅱ) L. 32		(Ⅱ) L. 32	○	
	文化中級日本語ⅠⅡ	16		(Ⅰ) L. 7			
6	新文化初級日本語Ⅰ	18				○	
	新文化初級日本語Ⅱ	18	(Ⅱ) L. 32		(Ⅱ) L. 32	○	
7	進学する人のための日本語初級	22		(初) L. 21		○	
	進学する人のための日本語中級	24	(中) L. 8				
8	中国人のための日本語	41	L. 39	L. 29			
9	日本語で学ぶ日本語初級	25	(初) L. 20	(初) L. 20	(初) L. 20		
	日本語で学ぶ日本語中級	25					
10	日本語Ⅰ、2、3(上)	60				○	
	日本語Ⅰ、2、3(下)	63	(下) L. 111	(下) L. 110		○	
11	中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ	24	(Ⅰ) L. 14/L. 18	(Ⅰ) L. 22		○	
	中国からの帰国者のための生活日本語Ⅱ	9	(Ⅱ) L. 6	(Ⅱ) L. 2	(Ⅱ) L. 9	○	
12	Japanese for Busy PeopleⅠ	30				○	
	Japanese for Busy PeopleⅡ	20				○	
	Japanese for Busy PeopleⅢ	20	(Ⅲ) L. 1	(Ⅲ) L. 4		○	
13	視聴應用日本語Ⅰ (台湾出版)	30					
	視聴應用日本語Ⅱ (台湾出版)	22		(Ⅱ) L. 33			
14	日本語 基礎篇 (台湾出版)	69		L. 56			
15	初級からの日本語Ⅰ (台湾出版)						
	初級からの日本語Ⅱ (台湾出版)	16	(Ⅱ) L. 11	(Ⅱ) L. 11	(Ⅱ) L. 11		
16	精英日語 初級Ⅰ (台湾出版)	12					
	精英日語 初級Ⅱ (台湾出版)	12	(Ⅱ) L. 18	(Ⅱ) L. 18	(Ⅱ) L. 18		
17	標準日本語 初級Ⅰ (台湾出版)	25					
	標準日本語 初級Ⅱ (台湾出版)	25	(Ⅱ) L. 43	(Ⅱ) L. 43			
18	功能意念學日語Ⅰ (台湾出版)	12	L. 4 / L. 9				
	功能意念學日語Ⅱ (台湾出版)	12	(Ⅱ) L. 14				

【表4】各教科書に提示される意味・用法

	教科書	提出課	伝聞			推量			婉曲			伴う 副詞
			ようだ	らしい	みたいだ	ようだ	らしい	みたいだ	ようだ	らしい	みたいだ	
1	みんなの日本語 Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)47				○						どうも
2	新日本語の基礎 Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)47				○			●			どうも
3	日本語Ⅰ Ⅱ	(Ⅰ)16				○	○					
4	初級日本語	25	○			○						どうも
		28		○			○					どうも
5	文化初級日本語 Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)32				○		○	●			
	文化中級日本語 Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)7		○			○					どうも
6	新文化初級日本語 Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)32				○		○				
7	進学する人のための日本語 初級・中級	(初級) 21					○					
8	中国人のための日本語	29		●			*					
		39				○						
9	日本語で学ぶ日本語初級・中級	(初級) 20				○	○	○				どうも
10	日本語1・2・3(上)(下)	(下)110		●			○					どうも
		(下)111				○		*	●		●	
11	中国からの帰国者のための生活日本語Ⅰ Ⅱ	(Ⅰ)14、18							○			
		(Ⅱ)6										
		(Ⅱ)9									○	
		(Ⅰ)22					○					
		(Ⅱ)2		●			*					
12	Japanese for Busy PeopleⅠ ⅡⅢ	(Ⅲ)1				○						
		(Ⅲ)4		●			*					
13	視聴應用日本語Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)33		○								
14	日本語 基礎篇	56		●			*					
15	初級からの日本語1・2	(Ⅱ)11		○		○	○	○	○			
16	精英日語 初級Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)18		○		○	○	○	○		○	
17	標準日本語 初級Ⅰ Ⅱ	(Ⅱ)43		○		○	○					
18	功能意念學日語Ⅰ Ⅱ	(Ⅰ)4				*			●			
		(Ⅰ)9				○			●			どうも
		(Ⅱ)14							○			
	取り上げる教科書数/冊		1	11 (6)	0	14	10	5	9 (4)	0	3 (2)	7

冊ある。その中で、中国語の教科書は3冊もあり、1/2の比率も占めた。この状況は、類似する文法項目は中国語で説明するのが容易なので、中国語の教科書では類似する文法項目を同じ課で提出したことが原因だと考えられる。

4.2 各教科書の内容分析と比較

本節では、推量表現「ようだ」「らしい」「みたいだ」は、以上の18種類の日本語教科書ではどのような形で提示されるか、どのような使用場面で扱われるかについて調べ、各教科書における「ようだ」「らしい」「みたいだ」を含む文の会話や例文などを取り上げ、その文の発話意図や機能を分析していく。各教科書における「ようだ」「らしい」「みたいだ」の用法・機能を以下の表にまとめた。^{注4}

【表4】によると、今回調査した18種類の教科書の中で、「ようだ」の「推量」用法が提示されたものが一番多く、14冊ある。「らしい」の「伝聞」用法を提示する教科書は11冊あるが、明確に「伝聞」用法と定義したものは6冊あるだけである。「らしい」の「推量」用法を提示する教科書は10冊ある。「ようだ」の「婉曲」用法を提示する教科書は9冊あるが、明確に「婉曲」用法と定義したものは4冊しかない。また、推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」を指導する時に、「どうも」という副詞と一緒に提示する教科書は7冊ある。

以上の統計から見ると、現在の日本語教科書は、「ようだ」を「推量」用法として、「らしい」を「伝聞」用法として扱う傾向があると分かった。これ以外に、「らしい」の「推量」用法や「ようだ」の「婉曲」用法を提示する教科書は何冊もある。「みたいだ」の「推量」用法に触れるものは比較的少ない。

ここでは、代表的な教科書を3冊取り上げ、各教科書における推量表現「ようだ」「らしい」「みたいだ」の内容を、1.実例、2.分析、3.意味・用法、4.問題点という観点から調べる。

1.『みんなの日本語II』 第47課

(1) 実例

<例文 p. 178 >

- ・にぎやかな声がしますね。・・・ええ。パーティーでもしているようですね。⇒推量
- ・人が大勢集まっていますね。・・・事故のようですね。パトカーと救急車が来ていますよ。⇒推量

<本文 p. 179 >

高橋：渡辺さん、このごろ早く帰りますね。

どうも恋人ができたようですね。⇒推量

林：あ、知らないんですか。この間婚約したそうですよ。

高橋：えっ、だれですか、相手は。

林：IMCの鈴木さんですよ。

<文法書・指導書の説明>

この教科書の文法書や指導書では、「ようだ」は「話し手が自分の感覚、知覚でとらえ

たその場の状況に基にして、主観的に判断し、推測する」と説明している。

(2) 分析

例文1.では、話し手が「にぎやかな声がある」という自分の聴覚情報を根拠として推定を下したので、「推量」の「ようだ」を用いた。例文2.では、話し手が「人が大勢集まっている」と「パトカーと救急車が来ている」という視覚の根拠から、「事故がある」と推定し、「推量」の「ようだ」を用いた。

また、本文では、話し手が「渡辺さんはこのごろ早く帰る」という自分の感覚・印象を根拠として、「渡辺さんは恋人ができた」と推定し、「推量」の「ようだ」を用いた。

(3) 意味・用法

この教科書の編集者の意向は、「ようだ」は話し手がある根拠に基づいて、自らの推定を下す場合に使われる「推量」の用法であると分析できる。

(4) 問題点

一般的な会話場面では、「推量」を表す時に、「ようだ」より「みたいだ」の方がよく使われているが、この教科書では「ようだ」だけ取り上げ、「みたいだ」は取り扱っていないという問題点がある。特に、この課で提示された例文は、実際の会話場面で「みたいだ」のほうが適切なものが多いので、「ようだ」だけ提示すれば、学習者に不自然な言い方を身につけさせる可能性がある。また、「ようだ」の文体や待遇表現上の使い方を認識させるような例文や練習がない。

2. 『新文化初級日本語Ⅱ』 第32課

(1) 実例

<本文 p.133 >

(お祭り見物)

鈴木：お祭りに行きませんか。

チン：お祭りですか。いいですね。前から行きたいと思っていたんですよ。

鈴木：それはよかった。

チン：どこであるんですか。

鈴木：浅草です。この雑誌にいろいろ書いてありますよ。

チン：へえ、3日間も続くんですか。あっ、これ、おみこしですね。

鈴木：見たことがあるんですか。

チン：はい、前にテレビで見ました。楽しみだなあ。あ、阿部さんも誘いませんか。

鈴木：いいですね。でも最近忙しいみたいですよ。 ⇒推量

先週の日曜日も会社で仕事をしたって言っていました。

チン：日曜日も。大変ですね。

鈴木：ちょっと無理かもしれませんが、電話してみましょうか。

チン：そうですね。

鈴木：ちょっと待っててください。

.....

チン：どうでしたか。いましたか。

鈴木：いいえ。まだ帰っていないようです。後で、もう一度電話してみます。 ⇒推量

チン：私も電話してみます。

<例文 p.135>

1. パク：毎日、テレビでもラジオでも野球の放送をしていますね。

ワン：そうですね。野球は日本人に人気があるようですね。 ⇒推量

2. A：佐々木さんは引越したようです。 ⇒推量

B：そうですか。

A：手紙を出したんですが、戻って来てしまったんです。

3. A：電気がついていませんよ。

B：まだ、帰っていないみたいですね。 ⇒推量

4. マリー：ワンさんがかぜをひいて昨日休んだそうですね。

りー：ええ。でも、もうだいじょうぶなようですよ。さっき、食堂にいましたから。

⇒推量

5. (デパートで)

A：あの女の子、迷子のようですよ。 ⇒推量

B：そうですね。店員さんと呼んで来ます。

(2) 分析

本文では、「みたいだ」と「ようだ」は両者とも「推量」の用法として提示されている。話し手の鈴木さんが阿部さんから「先週の日曜日は会社で仕事をした。」という話を聞いて、この情報を根拠として「最近忙しい」と推定し、「推量」の「みたいだ」を用いた。そのあと、阿部さんに電話したが誰も出なかったという根拠から、「まだ帰っていない」と推定し、「推量」の「ようだ」を用いた。

(3) 意味・用法

この教科書の編著者の意向は、「みたいだ」と「ようだ」は両者とも話し手が自身の直接経験や感覚に依存し推定を下すという意味で、「推量」の用法として扱われると分析できる。

(4) 問題点

「ようだ」と「みたいだ」を同じ課で提出することも良いと思われるが、両者の文体上の違いという基本的な概念については言及していない。特に、両者の待遇表現上の差異や、「ようだ」>「みたいだ」という丁寧さの原理が、本文や例文の文脈からは理解できないという問題点がある。

3.『初級からの日本語2』 第11課

(1) 実例

<例文 p.142, 143>

1. A：友だちの話によると陳さんは株でけっこう損したらしいですよ。 ⇒伝聞

B：そうですか。大変ですね。

・陳さんは検定試験に受からなかったらしいです。 ⇒伝聞

・今度の台風はかなり強いらしいです。 ⇒伝聞

・王さんは学生らしいです。 ⇒属性描写（接尾辞の用法）

2. A：彼女はわたしに嘘をついたようです。 ⇒推量

B：それはいけませんね。

・陳さんの意見はわたしと違っているようです。⇒婉曲

・王さんはかなり神経が太いようです。⇒婉曲

・この仕事は相当危険なようです。⇒婉曲

・きょうは暑くて、まるで夏のようです。⇒比況

3. A：王さんはどんな人ですか。

B：陳さんみたいな真面目な人です。⇒比況

<会話 p.144 >

林：山登りはもう二年ぶりなので、ゆうべ興奮してよく眠れませんでした。

大橋：そうですか。今晩は頂上で一泊して、翌日、日の出を見るのがいいと思います。

林：まるで仙境にいるようです。⇒比況

大橋：もう待ちきれないですね。

<会話 p.145 >

鈴木：林さん、どうしたの？ 冴えない顔をして。

林：日本語能力試験一級に合格しなかったの。がっかりしたわ。

鈴木：そうですか。でもそんなにしょげないで。林さんらしくないぞ。自信を持って、来年また頑張る。⇒属性描写（接尾辞の用法）

林：うん、また頑張る。

<練習 p. 149 >

・高橋さんは最近あまりご飯を食べません。→高橋さんは最近ダイエットしているらしいです。⇒伝聞

・陳さんは冴えない顔をしています。→陳さんは株でけっこう損したらしいです。⇒伝聞

・楊さんは毎日ぶらぶらしています。→楊さんは会社を辞めたらしいです。⇒伝聞

・荘さんはいつも眠そうな顔をしています。→荘さんは毎晩徹夜しているらしいです。⇒伝聞

<練習 p. 150 >

・きょうは暑いですね。→今日は暑くて、まるで夏のようです。⇒比況

・陳さんは彼女と意見が合いません。→陳さんは彼女と喧嘩しているようです。⇒推量

・陳さんはどこにいますか。→陳さんは受付にいるようです。⇒推量

(2) 分析

例文1. に出ている「友だちの話によると陳さんは株でけっこう損したらしいですよ。」という文は、他者から情報を得たという情報源が明確なので、「伝聞」の用法として分析できる。しかし、同じ項目で取り上げられた例文では、「伝聞」用法以外に「属性描写」という接尾辞の用法も出ている。

例文2. で取り上げられた五つの「ようだ」の文は、前後の文脈がないので、話し手の発話意図が理解できない。しかし、一般的な状況から考えると、「推量」「婉曲」「比況」の用法が分析できる。

例文3.に取り上げられた「陳さんみたいな真面目な人です。」という文は、「比況」の用法である。

(3) 意味・用法

文法説明の部分から見ると、この教科書の編著者の意向は、「ようだ」には「比況」「推量」「婉曲」の用法があり、「らしい」には「伝聞」「属性描写」の用法があり、「みたいだ」には「比況」「推量」の用法があるということが分析できる。

(4) 問題点

この教科書は、「ようだ」「らしい」「みたいだ」の全ての用法を、1課の中で提示しようとしたが、殆どの例文は単文であり、発話の根拠となる文脈がないので、話し手がどのような態度を持って発話したのか、例文から読み取りにくい。

特に、各文型や練習の中に様々な用法が混在し、学習項目が明確ではないという問題点がある。例えば、「らしい」には「伝聞」用法、「属性描写」用法の例文が混在し、また、「ようだ」には、「推量」用法、「婉曲」用法と「比況」用法の例文が混在しているので、学習上の混乱を招く可能性が高い。また、文型の部分では、「ようだ」は「推量」用法、「婉曲」用法、「比況」用法三用法の例文を提示しているが、「みたいだ」は「比況」用法だけを提示している。各用法の提示と説明上の一貫性が見られないという問題点がある。

また、最初の導入段階で、「ようだ」「らしい」「みたいだ」三文型の全ての用法を一遍に提示することは、学習者の負担になると思われる。特に、この教科書には、類似する学習項目の提示方法の組み立てへの工夫が見られないという問題点がある。

4.3 日本語教科書における問題点

以上の教科書を分析すると、全体としてはいくつかの問題点が取り上げられる。

1. 推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」のうち、「ようだ」だけを取り扱って、「みたいだ」に触れていない教科書が多い。これは、従来の日本語教科書は日本語能力試験の出題基準に基づいて編纂されたことが原因であると考えられる。また、「ようだ」と「みたいだ」両項目とも提示した教科書でも、両者の文体や待遇表現上の差異に言及していない。
2. 「ようだ」「らしい」「みたいだ」にはそれぞれ「伝聞」「推量」「婉曲」の用法がある。そのいくつかの用法を同じ課で一遍に出しているが、それらの違いを明確に提示していない教科書が多いので、学習上の混乱を招く恐れがある。特に、教科書の文型や練習問題では、違う用法の例文が混在しているものが多いので、各用法の使い分けを明確に理解できないという問題点がある。
3. 台湾の教科書では「ようだ」「らしい」「みたいだ」といった類似した表現を、一つの課の中で一気に出すことが多い。これは、類似する文法項目は中国語訳で説明するのが容易なので、中国語の教科書では類似する文法項目を同じ課で提出することが原因だと考えられる。しかし、指導上の観点から見れば、台湾の教科書には学習項目の各用法や提出順の組み立てへの工夫が見られないという問題点がある。
4. 現在の日本語教科書は、類似した文法項目の導入に対して、一貫した教授法上の枠組みが見られないという問題点がある。例えば、推量表現「ようだ」「らしい」「みたいだ」の提出順については、一項目か二項目だけを提示する教科書もあり、また、三項目を同じ課で提示する教科書もあって、導入の順序に関しては、まだ計画性がないように思われる。
5. 以上の教科書で一番多く見られる問題点は、「文脈・場面の提供」が不足していると

いう問題点である。初級教科書は基本的に文型中心のものが多く、現在の教科書は、文法項目を含めた単文だけを提出しているため、前後の文脈を示していないという傾向がある。従って、学習者は教科書の例文から、話し手の発話意図が読み取りにくいという問題点がある。

6. 現在の日本語教科書は、本文や文型練習では、推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の「待遇表現」上の差異を認識させるような場面作りへの工夫がないという問題点がある。特に、「みたいだ」は「ようだ」のくだけた表現であり、両者には文体上の違いがあるという基本的な概念を取り上げている教科書が非常に少ない。

5. 使用意識の調査

5.1 調査の目的

初・中級の日本語教科書は、文法・文型を中心とした学習目的に合わせるために、不自然な例文を提示したり、機械的な練習を作ったりして、実際の使用状況と大きく異なる場合が多い。このような現状で、学習者は教科書に頼ってしまい、教科書の内容に影響され、不自然な言い方を身につけてしまう可能性がある。この問題点に対し、本稿では、アンケート調査を通じて、学習者の使用状況を調べ、学習上の困難点を明らかにし、今後の教科書の改善案を試みる。

5.2 調査の方法と対象

「ようだ・らしい・みたいだ」の使い分けの作例によるアンケートを作成し、台湾人日本語学習者を対象に、レベル別に分けアンケート調査を実施した。アンケートの構成は、選択式の問題 15 問と記述式の問題 1 問があり、様々な場面や人間関係を設定し、各状況でどんな言い方を使うかという問題に答えてもらった。アンケートの内容と各問題の制作意図は、付録をご参照されたい。

5.3 調査結果の分析と問題提起

5.3.1 調査の統計結果

学習者が各問題に対して選択した回答をパーセンテージで表し、調査結果を次の表にまとめた。^{注5}

【表 5】台湾人日本語学習者の回答統計

	中級レベル (52 人)			上級レベル (48 人)			合計 (100 人)		
	ようだ	らしい	みたいだ	ようだ	らしい	みたいだ	ようだ	らしい	みたいだ
1	86%	25%	48%	54%	42%	52%	71%	33%	50%
2	71%	27%	31%	58%	42%	38%	65%	34%	34%
3	75%	33%	38%	56%	42%	39%	66%	37%	39%
4	19%	69%	29%	28%	70%	31%	24%	70%	30%
5	79%	27%	35%	75%	31%	44%	77%	29%	39%
6	58%	21%	50%	60%	31%	29%	59%	26%	40%

7	56%	21%	63%	23%	27%	85%	40%	24%	74%
8	67%	42%	33%	65%	29%	38%	66%	36%	35%
9	33%	67%	31%	75%	44%	31%	53%	56%	31%
10	71%	17%	48%	55%	45%	34%	52%	38%	49%
11	25%	81%	21%	58%	48%	23%	41%	65%	22%
12	17%	90%	44%	48%	58%	38%	32%	75%	41%
13	60%	46%	52%	60%	35%	58%	60%	41%	55%
14	62%	42%	33%	65%	35%	42%	63%	39%	37%
15	35%	73%	40%	60%	37%	52%	47%	56%	46%

5.3.2 調査結果の分析

台湾人学習者 100 名を対象に行ったテストの結果をもとに、「ようだ・らしい・みたいだ」の習得では、どのような問題を抱えているかを分析する。

<台湾人学習者の場合>

1. Q.1、Q.3、Q.5 など「推量」を表す一般的な会話場面では、「ようだ」を選択した比率が「みたいだ」より高いということから見ると、現在の日本語教科書は、三項目のうち、「ようだ」に重点をおき、或いは「ようだ」だけ提示するものが多いので、学習者が教科書の影響を受け、普通の会話場面では「ようだ」をよく使ってしまうことが原因であると考えられる。
2. Q.1 と Q.2 の「待遇レベル」が明白に違う会話場面では、二問とも「ようだ」の回答が一番多いということから見ると、「推量」を表す時に、「待遇レベル」によって「ようだ」と「みたいだ」の使い分けに違いが出てくることを理解していないと考えられる。
3. Q.4 の「伝聞」用法の問題では、中級レベルでも、上級レベルでも、「らしい」を選択した答えが一番多いということから見ると、「らしい」の「伝聞」用法はだいたい定着していることが分かる。
4. Q.6 と Q.13 の「婉曲」用法の問題では、「ようだ」と「みたいだ」の回答は、両者とも 50 % を超え、かなり高い比率を占めたという結果から見ると、台湾の日本語学習者は、「ようだ」と「みたいだ」の「待遇レベル」上の違いをまだ区別できないということが分かる。
5. Q.9、Q.11 の「責任意識」に関する問題は、上級レベルは「ようだ」を選択した比率が一番高いが、中級レベルは「らしい」を選択した比率が一番高いということから見ると、中級レベルの学習者は、Q.9 の担当者と Q.11 の記者としての発話では、「ようだ」は責任意識があり、「らしい」は責任意識がないという概念は全くないということが分かる。
6. Q.10 の「推量」を表す時の話者の心理的態度に関する問題では、中級レベルでも、上級レベルでも、「ようだ」を選択した答えが一番多い。この結果から見ると、学習者は、この会話場面における「うーん、あまり確かじゃないけど……」という発話から、話者が「ひきはなしの態度」を取って推量判断を下したというニュアンスが

理解できないようである。

7. Q.12とQ.15の「推量」用法の問題では、「らしい」を選択した比率が一番多いという結果から見ると、学習者は、一般的な会話場面で、「推量」を表す時に、「ようだ」と「みたいだ」の使用が一番自然であることを理解していないようである。
8. 最後の記述式問題では、「ようだ」「らしい」「みたいだ」三項目は中国語訳が同じなので、三者の異同を区別できないという答えが一番多く、半分以上に達した。

以上の分析から見ると、台湾の日本語学習者は「推量表現」に対する認識がまだ定着していない。特に、各使用場面にふさわしい使い方が理解できないという傾向がある。

<日本人母語話者の場合>

日本人母語話者にも100名を対象に同じ調査を行った。その結果を分析すると、日本人の推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」に対する一般的な使用意識には、以下のような傾向が見られる。

1. 「推量」を表す時に、一般的な会話場面では、「みたいだ」は「ようだ」より多く使われている。
2. 一般的な使用場面では、「らしい」はほとんど「伝聞」の用法として使われているが、「推量」の用法として扱われていない。
3. 相手や場面などの待遇レベルを意識し、「ようだ・らしい・みたいだ」を使い分けているという傾向がある。特に、相手レベル $\boxed{+}$ 、場レベル $\boxed{+}$ 、話題の人物レベル $\boxed{+}$ の場合は、「ようだ」という丁寧な言い方を使おうとする意識が高い。
4. 待遇レベル $\boxed{0}$ の場合は、謝るなど相手に対して丁寧な言い方を使うほうが良いと意識している場面では、「ようだ」が使われるが、それ以外は「みたいだ」のほうがよく使われる。
5. 責任意識の有無に関しては、「ようだ」は自分の発言としての責任感を持っているが、「らしい」は伝聞っぽい、無責任のニュアンスがあるという心理的な態度の違いを意識している傾向がある。
6. 最後の記述式問題の回答をまとめると、日本語母語話者の「ようだ・らしい・みたいだ」に対する一般的な認識は、以下のようなものである。

「ようだ」：推量を表す表現であり、丁寧、フォーマル、かたい言い方である。目上の人、店員が客に対してよく使われる。

「みたいだ」：推量を表す表現であり、カジュアル、くだけた言い方である。親しい人、友達、気の使わない人に対してよく使われる。

「らしい」：伝聞表現、うわさっぽい。自分とは関係がない、責任逃れのニュアンス。

6. 提 案

日本語教科書の内容とアンケート調査を分析した上で、「推量表現」「ようだ・らしい・みたいだ」の指導上の提案を試みる。その適切な提示方法としては、以下のようなポイントが考えられる。

1. 従来の日本語教科書は、三項目のうち「ようだ」に重点を置き、或いは「ようだ」

だけ提示するものが多い。また、日本語能力試験の出題基準に基づいて、「ようだ」と「らしい」を初級、「みたいだ」を中級という提出順で出し、或いは「ようだ」と「らしい」だけ提示し、「みたいだ」に触れていない教科書が多い。従って、日本語学習者が教科書の影響を受け、最初に定着する用法は「ようだ」なので、推量を表す様々な場面では「ようだ」しか使わない、「みたいだ」が使えないという傾向がある。しかし、自然な発話という観点から見れば、一般的な会話場面では、「ようだ」より「みたいだ」のほうが使用頻度が高い、また、待遇レベルによって両者の使用状況も異なるので、以上の問題点に対して、適切な指導方法としては、「みたいだ」も初級の段階で「ようだ」と同時に導入し、その文体や待遇レベルの差異を学習者に認識させたほうが効果的だと思われる。

2. 日本人母語話者を対象とするアンケート調査の結果から見ると、実際の日本語会話場面では、「らしい」は「推量」用法として使われることが少なく、「伝聞」用法として使われることが多いということが明らかになった。典型的な使い方を学習者に認識させるために、初級の導入段階では、「らしい」を「推量」の「ようだ・みたいだ」と別に、違う課で「伝聞」用法として提示するほうが良いと思われる。
3. 推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の学習上の混乱を招かないために、適切な指導方法としては、三項目とも一つの課の中で取りあげないで、用法・機能別に提示するほうが明確的であると思われる。例えば、最初の段階では、「らしい」を「伝聞」の用法として、「ようだ」と「みたいだ」を「推量」の用法として違う課で提示する。特に、「ようだ」と「みたいだ」を教える時に、両者の待遇レベルや丁寧さの違いを学習者に意識させる必要がある。三項目の基本的な概念が定着した後、次の段階では、「婉曲」の用法を提示し、様々な場面における話者の心理的態度や責任意識の差異を学習者に認識させる必要がある。
4. 各学習項目を教える際に、一緒に使われることの多い副詞とセットにした形で提示するほうが良い。例えば、「推量」用法を教える時に、「～ようだ / ～みたいだ」だけを提示するのではなく、「どうも～ようだ / どうも～みたいだ」という表現も学習者に提示するほうが効果的であると思われる。
5. 日本語教科書で一番多く見られる「文脈・場面の提供」が不足するという問題点に対して、適切な提示方法としては、単文だけではなく、会話や文章における人間関係・場面など提示し、前後文脈と絡み合う形で扱う必要がある。つまり、推量表現の具体例を取り上げる時に、単文ではなく、文脈・コンテキストのある会話や文章を提示し、その文脈における話し手の発話意図に気付かせ、各用法の典型的な人間関係や使用場面を学習者に認識させることが大切である。
6. 現在の日本語教科書は、推量表現「ようだ・らしい・みたいだ」の「待遇表現」上の差異を認識させるような場面作りへの工夫がないという問題点がある。これに対して、適切な指導方法としては、待遇表現と結び付け、相手や場面などを設定し、各用法を練習する方法が効果的だと思われる。特に、「推量」用法の「ようだ」と「みたいだ」を教える際に、待遇レベルに分けて具体例を練習させ、両者の待遇表現上の違いを認識させる必要がある。

7. おわりに

日本語教育の立場から見れば、初・中級の文型指導は、単なる文法項目の意味・用法を教えることだけではなく、学習者のコミュニケーション能力を高めるために、文型の用法・機能面に重点を置き、一連の使用場面を提示することも必要である。しかし、現在の日本語教科書は、各文法項目に対して、ほとんど単文を提示する形にとどまり、前後の文脈や使用場面が見えないという問題点がある。これに対して、様々な場面や状況の中で、学習項目がどのような発話意図で発せられているか自然に理解できるような文脈を学習者に与え、意味だけではなく、文脈における機能にも気づかせていく指導が有効だと考える。もちろん、実際の使用場面は無限に存在するから、そのすべてを提供することができないが、導入としては、いくつかの典型的な場面を提示し、基本的な用法を類型化することが大切である。

また、推量表現「ようだ」「らしい」「みたいだ」の文型指導においては、場面の正確な把握が必要であるので、学習者に練習させる際に、相手を一般化せず、待遇レベルを使い、相手を特定して教えるほうが効果的だと思われる。指導法としては、日常生活の中で学習者にとって、明らかにレベルが $\boxed{+}$ $\boxed{0}$ $\boxed{-}$ に当たる人との会話のやりとりを具体例として提示し、学習者の日本語環境に合致した人間環境の中で、待遇関係を意識しながら「ようだ」「らしい」「みたいだ」を学んでいくことが有効だと考えられる。

本稿では、「推量表現」の「ようだ・らしい・みたいだ」三項目だけ扱っているが、この三者以外の推量表現をいかに学習者に習得させるかは、待遇表現との関連なども含めて、今後に残された課題である。

注

1. 野林（1999）では、「ようだ・らしい」に関する従来の論説を三種類に分類したが、ここでは、野林の分類を参考にし、菊地（2000）の論点も取り入れ、四種類に分類した。
2. 「上下関係」という言い方や、それを $\boxed{+}$ や $\boxed{-}$ で表すことは、あくまでも社会における「人間関係」を相対的に位置づけることに主眼があり、「上下関係」というよりはむしろ「人間関係」の相対的距離感を示すものである。
3. 本稿では、「ようだ」「らしい」「みたいだ」の各教科書における「推量」用法だけ考察し、「比況」や「例示」などの用法を扱わない。
4. 教科書の内容に当たる用法は「○」の記号で示し、最後の統計に入れる。ただし、文法書や指導書で提示された用法以外に、筆者が加えた用法は「●」の記号で示し、最後の統計に入れる。また、文法書や指導書における説明が筆者の認定と違う時に、その教科書が提示した用法は「＊」の記号で示し、最後の統計に入れない。（）に書いてある数字は、教科書の中で実際にそのように定義をつけている教科書の数。
5. 初級レベルは「ようだ・らしい・みたいだ」の未習項目があるので、今回のアンケート調査の対象として扱わない。

参考文献

- 宮島達夫・仁田義雄（2001）『日本語類義表現の文法（上）（下）』くろしお。
 蒲谷 宏・川口義一・坂本 恵（2000）『敬語表現』大修館書店。

- 菊地康人 (2000) 「「ようだ」と「らしい」—「そうだ」「だろう」との比較も含めて—」『国語学』第51巻1号。
- 黒滝真理子 (2000) 「日英語のモダリティー「らしい」と「ようだ」をめぐって—」『紀要 桜美林英語英米文学研究』第40輯。
- 中村 互 (2000) 「「ようだ」「らしい」「そうだ」をめぐって—事態の捉え方の違いという視点から—」『早稲田日本語研究』第8号。
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』(第11章 真偽判断を表す「ようだ」と「らしい」) くろしお。
- 野林靖彦 (1999) 「類似のモダリティ形式「ヨウダ」「ラシイ」「ソウダ」—三水準にわたる重層的考察—」『国語学』197号。
- 木下りか (1998) 「ヨウダ・ラシイ—真偽判断のモダリティの体系における「推論」」『日本語教育』96号。
- 日本語教育誤用例研究会 (1997) 『類似表現の使い分けと指導法』アルク。
- 野林靖彦 (1997) 「「ヨウダ」と「ラシイ」—認識判断が下される状況の連関—」『国語学研究』36号。
- バルバラ・ピッツィコーニ (1997) 『待遇表現から見た日本語教科書—初級教科書五種の分析と批判—』くろしお。
- 大鹿薫久 (1995) 「本体把握—「らしい」の説—」『日本語の研究：宮地裕・敦子先生古稀記念論集』明治書院。
- 紙谷栄治 (1995) 「助動詞「ようだ」「らしい」について」『宮地祐・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院。
- 中川良雄 (1995) 「「らしい・ようだ」の意味と機能—日本語教科書における「らしい・ようだ」の取り扱い—」『京都外国語大学研究論叢』46巻。
- 三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』183巻。
- 森山卓郎 (1995) 「推量・比喩比況・例示—「よう/みたい」の多義性をめぐって—」『日本語の研究：宮地裕・敦子先生古稀記念論集』明治書院。
- 国際交流基金 日本語国際センター (1993) 『教師用日本語教育ハンドブック4 文法Ⅱ 助動詞を中心にして改訂版』凡人社。
- 富田隆行 (1993) 『教授法マニュアル70例(下)』凡人社。
- 金 東郁 (1992) 「モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い」『日本語と日本文学』(筑波大)17号。
- 中村豊美等 (1992) 『入門日本語教授法』創拓社。
- 田野村忠温 (1991) 「「らしい」と「ようだ」の意味の相違について」『言語学研究』10号。
- 中畠孝幸 (1990) 「不確かな判断—ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』1号。
- 益岡隆志・田窪行則 (1990) 『基礎日本語文法』(第6章 ムード) くろしお。
- 関 正昭 (1990) 『外国人に教える日本語の文法—日本語教育文法QとA』一光社。
- 岡崎敏雄 (1989) 『日本語教育の教材 分析・使用・作成』アルク。
- 仁田義雄・益岡隆志 (1989) 『日本語のモダリティ』くろしお。
- 西原玲子等 (1988) 『外国人のための日本語例文・問題シリーズ5』(第八章 文のムードを表す形容詞) 荒竹出版。
- 早津恵美子 (1988) 「「らしい」と「ようだ」」『日本語学』7巻4号。
- 森田良行 (1988) 『日本語の類義表現』創拓社。
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお。
- 奥田靖雄 (1985) 「おしはかり(二)」『日本語学』4巻2号。
- 柴田 武 (1982) 「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」国広哲弥編『ことばの意味3』平凡社。
- 柴田 武 (1982) 「基礎語柴田辞典」(その「らしい」「ようだ」の項) 国広哲弥編『ことばの意味3』平凡社。
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2—意味と使い方』角川書店(「ようだ」の項と、その関連語としての「らしい」の項)。
- 柏岡珠子 (1980) 「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41号。
- 国立国語研究所 (1978) 『日本語教育指導参考書4 日本語の文法(上)』(8. 心的態度(ムード)の表現)。

【資料1】アンケート

<p>(1) 問題 次のそれぞれの問題の答えとして適当だと思うものを①「よう」、②「らしい」、③「みたい」から選び、必要ならば、文章に合うような形に変えて、かつこの中に書いてください（複数可）。また、二つ以上を選んだ場合、その違いについても簡単に説明してください。</p> <p>Q1. (夜9時、AさんとBさんが友達の木村さんの家を訪ねた。) ＜AさんとBさんの人間関係：友達同士＞ A：「木村さんはまだ帰っていない_____ですよ。部屋の電気が消えています。」 B：「おかしいなあ。こんな時間にどこへ行ったのかしら。」</p> <p>Q2. (夜9時、AさんとBさんが社長の木村さんの家を訪ねた。) ＜AさんとBさんの人間関係：同僚＞ A：「社長はまだお帰りになっていない_____ですよ。部屋の電気が消えています。」 B：「おかしいですね。こんな時間にどこへ行ったのでしょうか。」</p> <p>Q3. (AさんとBさんと鈴木さんが駅前で待ち合わせる。) ＜Aさん、Bさんと鈴木さんの人間関係：友達同士＞ A：「鈴木さん、遅いですね。」 B：「ええ。電話してみましようか。」 (鈴木さんの家に電話したが、誰も出なかった。) 「もう出た_____ですよ。誰も電話に出ないから。」 A：「そうですか。じゃ、もう少し待ちましよう。」</p> <p>Q4. (社員のAさんとBさんが休憩室で話している。) ＜AさんとBさんの人間関係：同僚＞ A：「田中さんは、最近とてもいきいきしていますね。」 B：「ちっとうわさを聞いたんですが、来月結婚する_____ですよ。」 A：「えー、本当ですか。誰から聞いたんですか。」</p> <p>Q5. (朝、森田さんと佐藤さんがバス停で会っ</p>	<p>た。) ＜森田さんと佐藤さんの人間関係：近所の友達同士＞ 森田：「佐藤さん、顔色が悪いですよ。どうしたんですか。」 佐藤：「どうも風邪を引いた_____です。熱っぽくて、のども痛いです。」 森田：「え、大丈夫ですか。今日はやっぱり会社に休みを取って、家で休んだほうがいいですよ。」</p> <p>Q6. (デパートの靴売り場で) 客：「すみません。この靴をはいてみてもいいですか。」 店員：「はい。どうぞ、お試しください。」 客：(試着後)「すみません、23.5はありますか。」 店員：「少々お待ちください。今、在庫を調べてきます。」 (戻ってきて) 「申し訳ございませんが、23.5は今在庫がなくなってしまった_____です。」</p> <p>Q7. (Aさんが教室に入った時に、見知らぬ人が先生と話しているのを見て、隣に座っているBさんに聞く。) ＜AさんとBさんの人間関係：クラスメート＞ A：「あの人は誰ですか。」 B：「誰でしょう。このクラスの学生じゃない_____ですね。」</p> <p>Q8. (Aさんが中田さんのお宅に電話して) A：「もしもし、中田さんのお宅ですか。」 B：「いいえ、違います。何番におかけですか。」 A：「2701-3695です。」 B：「番号はうちと同じですが、うちは坂本です。」 A：「ああ、そうですか。私の記憶違いだった_____です。失礼しました。」</p> <p>Q9. (取引先から帰ってきた社員が、会社で部長に報告している。) 部長：「〇〇会社の件はどうなりましたか。」 社員：「〇〇会社の社長はこの計画に賛成している_____です。今日話した時に、協力するとおっしゃっていましたが…。」</p> <p>Q10. (AさんとBさんが自習室で試験について</p>
---	---

<p>話している。)</p> <p>< AさんとBさんの人間関係：友達同士></p> <p>A：「この問題は試験に出ると思う？」</p> <p>B：「この問題は出ないけど、この問題は出る_____。」</p> <p>A：「え、本当？」</p> <p>B：「うーん、あんまり確かじゃないけど…。」</p> <p>Q11. (記者が事故の現場で報道している。)</p> <p>「当時現場にいた目撃者たちの証言によると、運転手の居眠りが事故の原因_____です。」</p> <p>Q12. (授業が始まり、先生は出席をとっている。)</p> <p>先生：「山口さん……山口さん。あれ、今日欠席ですか。」</p> <p>学生：「あ、先生。山口さんは来てはいる_____です。鞆はここにありますので…。」</p> <p>Q13. (図書室で資料をコピーしようと思ったが、コピー機のボタンを押しても全然動かない。)</p> <p>利用者：「すみません。図書室のコピー機が故障している_____ですが。」</p> <p>スタッフ：「あ、そうですか。少々お待ちください。すぐ直しに行きます。」</p> <p>Q14. (工事責任者が会社の人に報告している。)</p>	<p>工事責任者：「実は、昨日、工事現場の作業員と話し合ったんですが、この工事を今月末までに終えるのは、どうも難しい_____ですが……」</p> <p>会社の人：「そうですか。……じゃ、いつごろになるんですか。」</p> <p>Q15. (担任の田中先生と英語の木村先生は事務室で話している。)</p> <p>木村：「田中先生のクラスの王さんは、最近ちゃんと勉強している_____ですね。ここ何回かのテストでいい点数を取ったんですよ。」</p> <p>田中：「そうでしたか。王さんはこの前の中間テストで、何科目も平均以下だったので、本当に心配してたんですよ。」</p> <p>木村：「でも、この調子で行けば、期末試験はたぶん大丈夫だと思いますよ。」</p> <p>Q16. 「ようだ」「らしい」「みたいだ」にはニュアンスの違いがあると思いますか。あるなら、それぞれの違いについて簡単に書いてください。</p> <p>(2) アンケート</p> <p>1. 名前：_____</p> <p>2. 年代：_____</p> <p>3. 性別：_____</p>
---	---

【資料2】アンケートの制作意図

アンケートの各問題の制作意図は、以下のようである。

- 問題1：話し手自身の直接経験（視覚の情報）を根拠とする「推量」+待遇レベル ($A_{[-/0]} \cdot W_{[0]}$)
- 問題2：話し手自身の直接経験（視覚の情報）を根拠とする「推量」+待遇レベル ($A_{[0]} \cdot W_{[+]}$)
- 問題3：話し手自身の直接経験（非視覚の情報）を根拠とする「推量」+待遇レベル ($A_{[-/0]} \cdot W_{[0]}$)
- 問題4：「伝聞」を述べる状況 ($A_{[0]} \cdot W_{[0]}$)
- 問題5：自分のことに対する「推量」+待遇レベル ($A_{[0]}$)
- 問題6：「婉曲的な用法」+待遇レベル ($A_{[+]}$)
- 問題7：「推量」+待遇レベル ($A_{[-/0]} W_{[0]}$)
- 問題8：「婉曲的な用法」+待遇レベル ($A_{[0]}$)

問題9：「責任意識」の有無+待遇レベル (A $\boxed{+}$)

問題10：「推量」+話者の心理的態度+待遇レベル (A $\boxed{-/0}$)

問題11：「責任意識」の有無 (A $\boxed{0/+}$)

問題12：話し手自身の直接経験（視覚の情報）を根拠とする「推量」+待遇レベル (A $\boxed{+}$
W $\boxed{0}$)

問題13：「婉曲的な用法」+待遇レベル (A $\boxed{0}$)

問題14：「責任意識」の有無+待遇レベル (A $\boxed{+}$)

問題15：間接の情報を根拠とする「推量」+待遇レベル (A $\boxed{0}$)

問題16：「ようだ・らしい・みたいだ」三者に対する認識